

1. はじめに

パスパ文字を使用する習慣は、元朝の滅亡後も、チベットの一部で近代まで続いた。それは印鑑や紙幣の銘文にみることができる⁽¹⁾。またチベットやアムド地方や内蒙古の仏教寺院の門扉にもパスパ文字による祈祷文が刻されているという⁽²⁾。しかしながら、元朝の滅亡後、少なくとも中国の文人の間ではその使用の習慣は途切れてしまったとみて大過はないであろう。そうであるならば、この文字を読み解くには、そのための「一定の手続きの発見」すなわち「解説」⁽³⁾という作業を経なければならなかったはずである。おそらくパスパ文字資料に接した近代のヨーロッパ人にとっても状況は同様であったと想像する。解説といっても、パスパ文字の場合、この文字の背景に対する理解と、チベット文字の知識があれば比較的容易におこなうことができる。この文字の解説の仕事は、詳細は未だ明らかではない部分もあるが、19世紀中葉のヨーロッパ人の研究によって完成されたとおもわれる⁽⁴⁾。それ以後は、解説というよりも、「一定の手続き」を利用しておこなう言わば資料の読解とか解釈ということになる。そこで問題の一つは、本格的な解説に至るまでに、どのようなアプローチがこの文字に対してなされたかという解説前史をつまびらかにすることであろう。もっとも、ヨーロッパ人と中国人の研究の歩みが期を一にしているとも限らず、むしろ初期においては没交渉であるかもしれず、そのような見方をすると、それぞれの研究史が必要となるのであろう。しかしそれはいま少し後の課題である。

さて、ここに解説前史に関わる恰好の書がある。『説錢』⁽⁵⁾という書で、宋代より民国初期に至る錢幣に関わる29種の著作の影印を収めたものである。この書を手がかりとして、パスパ文字が鑄込まれた貨幣がどのように扱われたか、その銘文をどのように読んだかということにつき確認をし、パスパ文字研究史のなかに位置づけてみたい。それに先立ち、様々なパスパ文字資料があるなかで、何故貨幣の銘文を扱うのかということにつき一言しておかなければならないであろう。貨幣という性質上、それが実用に供されるものであれ、寺院などから発行される記念品のようなものであれ、

同一規格のものが多数作られ世間に出回ることとなる。また、宋代以降貨幣の模刻を収める錢譜が刊行され、その模刻によってさまざまな銘文が人々の目に触れることとなった。こうして、通常それほど注目されることのない漢字以外の文字であっても、貨幣の銘文として使用された場合、金石研究者や収集家の目に触れ、関心が向けられ、判読の対象となり、それに係わる記述が数多く残される。そのため「判読の進展あるいは後退について、時代別にたどることができる」⁽⁶⁾という便宜が生ずることとなる。

2. 欽定錢録

さて、先に紹介した『説錢』という書に収められた 29 種の著作の内、パスパ文字錢の記述が見えるものとして、先ず『欽定錢録』をあげることができる。この書は、清の梁詩正等が勅を奉じて編纂に着手し、乾隆十五年（1750）に成り、『西清古鑑』に付して刊行されたものである。その序に次のようにある。「内府之藏周羅几席、按状成圖、因之攷事」（句読は吉池が付した。以下同様）。この記述より、内府に蔵されていた貨幣をことごとく並べその形状によって模写を作ったことがわかる。内府所蔵の選り抜きの実物によったためであろうか、その模刻は極めて精密である。そこで、『欽定錢録』の卷十三の関係部分（『説錢』の 644 頁）を開いてみるとなかなか興味深い。漢字・漢語の至大通寶、パスパ文字・漢語の大元通寶、および銘文の一部にパスパ文字・漢語を含む至正通寶の三種の模刻が並んでいる。それぞれには解説が付されている。その模刻と解説を確認すると次のようである。なお、パスパ文字はローマ字に翻字し提示する⁽⁷⁾。

さて、当該書の最初には、漢字・漢語の至大通寶とパスパ文字錢の模刻が並んでいる。パスパ文字錢の模刻は極めて精密なもので上下左右に銘文がある。上「tay」（大）、下「'üen」（元）、左「t'unj」（通）、右「bav」（寶）とあり、大元通寶であることはすぐにわかる。以上は現在の目から見た資料の状況であるが、この模刻に対して付された当時の解説は次のようである。

右元武宗錢二品。前一品曰至大通寶、楷書。後一品曰大元通寶、西番篆書。

（右は元の武宗[時代発行]の錢二品である。前の一品には「至大通寶」とある。これは漢字の楷書である。後の一品には「大元通寶」とある。こちらはチベットの篆書である。）

この記述によると、パスパ文字・漢語錢を「大元通寶」であると間違いなく読んでいる。一方で、この文字を「チベットの篆書」とする。これはどうしたことであろうか。パスパ文字は、チベット文字を角ばらせ、やや変形を加えて作ったとみて大過ない。形の上から判断する限り「チベットの篆書」としても悪くはない。しかしながらこの文字は、モンゴル時代にモンゴルのために作られたものであり、当時は「蒙古新字」あるいは「国字」などと呼ばれていた。上記の「チベットの篆書」という言い方にはこのような認識は反映されていない。

次に三種の至正通寶の模刻がある。一枚目はオモテ面に漢字・漢語で「至正通寶」とあり、ウラ面の上部にはパスパ文字・漢語で「šin」とある。この「šin」は十二支の辰を音写したものである。二枚目はオモテに漢字・漢語で「至正通寶」とあることは変わらず、ウラの上にはパスパ文字・漢語で「zi」とある。この「zi」は漢語の二であり貨幣の単位をあらわす。方形の四角い孔を隔てて下部に漢字・漢語で「二」とある。三枚目もやはりオモテに漢字・漢語で「至正通寶」とあり、ウラの上には「mav」とある。これは十二支の卯である。なお、これは文字の判読とは関係の無いことであるが、並べられた三種の貨幣の寸法は大中小と次第に小さくなっていく。以上は現在の目から見た資料の状況である。この模刻に対して付された当時の解説は次のようである。

右順帝至正通寶錢凡三種、以次遞小。前一種及最小一種背文西番篆、讀作「巴納」、蓋梵語「錢」字也。第二種背文上一字亦西番篆、讀作「額」、下楷書曰「二」、蓋當二耳。

(右は順帝の至正通寶錢三種である。大より小へと並ぶ。初めの一種と後の最も小さなもののウラの銘文はチベットの篆書であり、「巴納」と読む。梵語の「錢」に当たる語であろう。二種目のウラの銘文の上部にある字もまたチベットの篆書であり、「額」と読む。下部には漢字の楷書で「二」とある。當二[當～は貨幣の大きさを示す専用の語]であることを示すのであろう。)

これによると、一枚目の「šin」と三枚目の「mav」は「巴納」と読み梵語の「錢」であるという。この「巴納」という音形が何を指すか明らかではないけれども或いはサンスクリットの *bhānda* (財物、資産の意) に関わりのある語であるかもしれない。二枚目の「zi」であるが、こちらは「額」と読むということである。「額」の意味するところは明らかにされていない。

以上を要するに、『欽定錢録』（乾隆十五年・1750年）の至正通寶のパスパ文字の読みとして示されている「巴納」や「額」は荒唐無稽なものであり、この文字をまったく理解していないことがわかる。もっとも、大元通寶に相当するパスパ文字銘文のほうは、正しく「大元通寶」と読んでいるように見える。しかしながら、至正通寶のパスパ文字銘文を「巴納」「額」などとするとところからみて、ここでの「大元通寶」とする読みは、上下左右の四箇所にあるパスパ文字をそれぞれ判読した結果ではなく、この種の銘文を大元通寶とする読み癖があり、それに従ったにすぎないとも考えられる。

『欽定錢録』が、私製の錢譜ではなく、勅を奉じて編纂されたものであるからには、ここには当時の平均的な学問水準が示されているとみてよいであろう。パスパ文字を正しく判読していないという点で、判読の出発点とすることができる。

3. 吉金所見録

次に『吉金所見録』がある。これは錢譜として名高いもので、清の初尚齡によって嘉慶二十四年（1819）に刊行された。やはり貨幣の精密な模刻を掲げ、それに解説を付している。卷之十三の関係部分（『説錢』の772-773頁）を順に見ていくと次のようである。

先ず、漢字・漢語の至大通寶の模刻を挙げ、次いでパスパ文字・漢語の大元通寶の模刻を挙げる。その解説は次のようである。

右武宗大元通寶、蒙古字書、當五錢。『西清古鑑』武宗錢二品、前一品曰至大通寶、楷書。後一品曰大元通寶、西番篆書。

（右の武宗の大元通寶は、蒙古字書による當五の錢である。『西清古鑑』は『武宗の錢二品。前の一品には至大通寶とある。これは漢字の楷書である。後の一品には大元通寶とある。こちらはチベットの篆書である』とする）

ここで言う『西清古鑑』とは、先に紹介した『欽定錢録』のことである。同書を引用してパスパ文字・漢語の貨幣銘文を「大元通寶」と正しく読んでいる。なおパスパ文字を、『欽定錢録』は「西番篆書」と呼び『吉金所見録』は「蒙古字書」と呼ぶわけであるが、これをパスパ文字の背景に対する理解の進展とみてよい。

続いて別のパスパ文字錢の模刻がある。上「ᠵᠢ」（至）、下「ᠡᠭᠡᠨ」（元）、

左「t'uj」（通）、右「bav」（寶）とあり、至元通寶であることがわかる。大小二つの模刻がある。その解説は次のようである。

右大元通寶蒙古字書錢二品、以次遞小。

（右は大元通寶の蒙古字書錢二品である。大小の順に並ぶ。）

至元通寶を「大元通寶」と誤って読んでいる。これが誤刻でなかったとしたならば、著者の単純な誤読であるか、或いはパスパ文字だけから成るこの種の貨幣の銘文を大元通寶とする読み癖があり、それに従ったということであろう。

最後に至正通寶の模刻がある。幾つかの模刻のうち、四種の至正通寶につき興味深い記述がある。以下順次紹介する。

一つ目は「šin」（辰）とする至正通寶の模刻である。その解説は次のようである。

穿上有蒙古字。『西清古鑑』背文西番篆書、讀作「巴納」、蓋梵語「錢」字也。翁宜泉云、背文蒙古「辰」字。

（穿[貨幣中央の方形の穴]の上部に蒙古字がある。『西清古鑑』は『ウラの銘文はチベットの篆書であり、「巴納」と読む。梵語の「錢」に当たる語であろう』とする。翁宜泉は『ウラの銘文は蒙古の「辰」の字である』とする。）

上記『吉金所見録』の解説は、『西清古鑑』すなわち『欽定錢録』の説および翁宜泉の説を紹介する。両者のうち翁宜泉は正しく「辰」と読む。翁宜泉という人物について、『吉金所見録』の凡例によると、「余古金之好、四十餘年來同好者、海昌陳興伯、廣陵江秋史、北平翁宜泉、同邑趙北嵐數家。」とある。これより『吉金所見録』の著者と同時代の北平（現在の北京）の人であったことがわかる。また鮑康著『觀古閣叢稿』（同治十二年・1873）には「古泉彙攷八卷、大興翁宜泉先生樹培著也。」（『説錢』42頁）とある。これより翁樹培・宜泉には『古泉彙攷』という古錢書のあったことがわかる。残念ながら『説錢』には掲載されていない。

二つ目は「zi」（二）とする至正通寶である。その解説は次のようである。

右至正通寶、當二錢。背上一蒙古字、下楷書「二」字。『西清古鑑』順帝至正錢有一種、背文上一字亦西番篆書、讀作「額」。下楷書「二」字、蓋當二錢也。

（右の至正通寶は當二の錢である。ウラ上部には蒙古字があり、下部には漢字楷書の「二」の字がある。『西清古鑑』は『順帝の至正錢に

は、ウラの銘文の上部にチベットの篆書があり「額」と読むものがある。下部には漢字楷書で「二」とある。當二であることを示すのであろう』とする。)

『西清古鑑』すなわち『欽定錢録』の誤った説を紹介するのみで、パスパ文字「zi」(二)の正しい読みはない。

三つ目は「u」(午)とする至正通寶である。その解説は次のようである。

背文翁宜泉云、是蒙古「午」字。

(ウラの銘文につき、翁宜泉は『蒙古の「午」の字である』とする。) 翁宜泉の正しい読みを紹介する。

四つ目は「ši」(十)とする至正通寶である。その解説は次のようである。

右至正當十大錢、背上亦有一蒙古字。翁宜泉云、背上蒙古「十」字、蓋當十錢也。

(右の至正通寶は當十の大錢であり、ウラ上部にはまた蒙古字がある。翁宜泉は『ウラ上部は蒙古の「十」であり、當十の錢であろう』とする。)

翁宜泉の正しい読みを紹介する。

以上を要するに、乾隆十五年(1750)の段階では「šin」(辰)、「zi」(二)、「mav」(卯)のいずれも正しく読むことができなかつたけれども、70年後の嘉慶二十四年(1819)の段階で翁宜泉の説を引き「šin」(辰)、「u」(午)、「ši」(十)を正しく読んでいる。このことに拠り「乾隆十五年(1750)から嘉慶二十四年(1819)に至る間にパスパ文字の判読が進展した」⁽⁸⁾ということがわかる。本格的な解読に至るまでに、どのようなアプローチがこの文字に対してなされたか、という解読前史を示すものと期待してよいかもみれず、翁宜泉の読みがどのように為されたかということに就き知りたいところである。

4. 古泉彙攷

翁宜泉については、先に述べたように、『吉金所見録』(嘉慶二十四年・1819)の凡例に「余古金之好、四十餘年來同好者、海昌陳興伯、廣陵江秋史、北平翁宜泉、同邑趙北嵐數家。」とある。これより『吉金所見録』の著者と同時代の北平(現在の北京)の人であったことがわかる。また鮑康著『觀古閣叢稿』(同治十二年・1873)には「古泉彙攷八卷、大興翁宜泉先生樹培著也。」「未及手訂行世、先生遽歸道山。諸城劉燕庭觀察喜海、覓得

其稿本、塗乙幾不可辨識。觀察竭三年心目、校録正本、屬鈔胥寫而存之。」(『説錢』43頁)とある。これより翁樹培・宜泉には『古泉彙攷』という未完の手稿本があり、翁氏の死後、劉燕庭がこれを手し、校訂の後に代書人に鈔本を作らせたことがわかる。この『古泉彙攷』がどのようなものであるか知りたいところである。『簡明古錢辭典』⁽⁹⁾によると、丁福保撰『古錢大辭典』⁽¹⁰⁾にその一部分が収録されているという。それで、『古錢大辭典』を見ると、幸いなことに『古泉彙攷』の序および元錢の解説部分が収められている⁽¹¹⁾。さらには翁宜泉の年譜まで付されている。それによると、翁氏は乾隆甲申の年(1764)に生まれ、丁未の年(1787)に進士、己酉の年(1789)に國史館會典館纂修官、嘉慶己巳の年(1809)には貴州司郎中となったが、翌年に享年46歳で没したという。なお『古錢大辭典』に収録された諸資料の中に「古泉彙攷序」という一文があり、そこには「乾隆丙午五月二十二日記。北宋南宋、附以偽齊、是為古泉彙攷卷之五」と記されている。これは『古泉彙攷』全八巻のうち第五巻目に付されたものであるから、本書は乾隆丙午の年(1786)から遠からぬ年に成ったとみて大過ないであろう。次に、収録された元錢部分の記述を順次検討する。

『古錢大辭典』(第三冊98丁。第四冊228丁及び231-233丁)に収録された翁樹培・宜泉著『古泉彙攷』の体例は、貨幣の模刻は無く、銘文のみが示され、その後「培按」として翁樹培自身の解説、および他書の引用が続く。いま関係部分に番号を付して列挙すると次のようである。なお解説の対象となる貨幣銘文は『』で示す。

1)『大元通寶』 培按；・・・省略・・・。面文蒙古書。「通」在左、「寶」在右、如蒙古書之「至元通寶」錢。以『蒙古字韻』証之、皆合。

(わたくし培が案ずるに、・・・・。オモテの銘文は蒙古書。「通」が左、「寶」が右にあり、蒙古書の「至元通寶」の如くである。『蒙古字韻』によりこれを証するに全て符号する。)

翁氏は「大元通寶」のパスパ文字を『蒙古字韻』によって確認をすることができるという。

2)『至元通寶』 培按；・・・省略・・・。又蒙古字錢。徑九分、似折二錢、重三錢。「元」「通」「寶」三字、畧如「大元通寶」、背輪郭亦如之。首一字作ji。攷之朱宋文『蒙古字韻』、確是「至」字。

(わたくし培が案ずるに、・・・・。また蒙古字の錢がある。直径は九分、

折二[折～は貨幣の大きさを示す専用の語]の錢に似て、重さは三錢。

「元」「通」「寶」の三字は「大元通寶」とほぼ同様であり、ウラの縁の形もまた同様である。最初の一字は *ji* とある。これを朱宋文の『蒙古字韻』によってみると確かに「至」の字であることがわかる。）

翁氏は「大元通寶」と「至元通寶」の「元」「通」「寶」は同じであるけれども、最初の一字は異なっており、朱宋文（ママ。朱宗文の誤写）の『蒙古字韻』により、「至」*ji* であることが確認できるという。

3)『至正通寶 幕 *yin* 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。

背為蒙古「寅」字、字尾與「辰」字同部也。

（わたくし培が案ずるに、この品には、小平、當二、當三 [以上三種は貨幣の大きさを示す専用の語]のものがある。ウラは蒙古の「寅」であり、この字尾と「辰」[の字尾]は同部である。）

「幕 *yin* 穿上」とあるところの「幕」は貨幣のウラ面の意であり、「穿」即ち貨幣中央の四角い孔の上部に *yin* の銘文があることを示したものである。翁氏は、*yin* を正しく「寅」と読み、「寅」と「辰」(*šlin*) の字尾（韻尾）は「同部」即ち同じ韻母であることを指摘する。

4)『至正通寶 幕 *mav* 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。

蒙古「卯」字、其字尾與「寶」字同部也。

（わたくし培が案ずるに、この品には、小平、當二、當三のものがある。蒙古の「卯」であり、この字尾と「寶」[の字尾]は同部である。）

翁氏は *mav* を正しく「卯」と読み、「卯」と「寶」(*bav*) の字尾（韻尾）は「同部」即ち同じ韻母であることを指摘する。

5)『至正通寶 幕 *šlin* 穿上』 培按；此品有小平錢重八分或重一錢、當二錢重一錢八分、當三錢重二錢八分。背為蒙古「辰」字、與「申」字極相類。但「辰」从 *š1* 為 *šlin*、「申」从 *š2* 為 *š2in*。江秋史云；*š1* 禪字頭、*in* 讀若「恩」。

（わたくし培が案ずるに、この品には、小平で重さ八分或いは一錢のもの、當二で重さ一錢八分のもの、當三で重さ二錢八分のものがある。ウラは蒙古の「辰」であり、これは「申」と字形が極めて似ている。但し、「辰」は *š1* に従い *šlin* とし、「申」は *š2* に従い *š2in* とする。

江秋史は『*š1* は禪字頭であり、*in* は「恩」のように読む』とする。）

翁氏は *šlin* を正しく「辰」と読み、*šlin* 「辰」と *š2in* 「申」の声母の字形が異なることを指摘する。さらに、江秋史を引用し、声母の *š1* は「禪

字頭」即ち禪母字で、韻母の in は「恩」のように発音するという説を紹介する。なお、禪母をはじめ、これ以降の説明の中に出てくる「邪母、喻母、日母、心母、審母」は「三十六字母」と称される古音の枠組みを示す伝統的な音韻学の用語である。これは『蒙古字韻』でも使用されており、江秋史はそれに拠ったものであろう。

- 6) 『至正通寶 幕 zhi 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。背為蒙古「巳」字。江秋史云；z 邪字頭、hi 讀若「滋」。此是「辰巳」之「巳」。若「四」字則作 shi 也。至「午」「五」則皆作 u。

(わたくし培が案ずるに、この品には、小平、當二、當三のものがある。ウラは蒙古の「巳」である。江秋史は『z は邪字頭であり、hi は「滋」のように読む。これは「辰巳」の「巳」である。もしも「四」という字があったとしたならば[巳と四は、今は同音であるけれどもパスパ文字表記は異なっており]shi と作る。もともと「午」と「五」は[今、同音であり、パスパ文字表記でも]共に u と作る』とする。)

翁氏は zhi を正しく「巳」と読む。さらに、江秋史を引用し、z は邪母字で、韻母の hi は「滋」の韻母のように発音するという説を紹介する。

- 7) 『至正通寶 幕 u 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。背為蒙古「午」字、但蒙古「五」字亦作 u。此則當就錢之大小制之精粗審之矣。江秋史云；u 此字頭在三十六字母之外。『蒙古字韻』云、歸喻字母。・・・以下省略・・・。

(わたくし培が案ずるに、この品には、小平、當二、當三のものがある。ウラは蒙古の「午」である。但し蒙古の「五」もまた u と作る。これ[「午」とするか「五」とするか]は、錢形の大小および製法の精粗により判断すべきである。江秋史は『u の字頭は三十六字母以外のもので、蒙古字韻には「歸喻字母」とある。・・・』とする。)

翁氏は u を正しく「午」と読む。さらに、江秋史を引用し、u の声母は三十六字母には無く『蒙古字韻』で「歸喻字母」(喻母に歸す)とするところのものであるという説を紹介する。いま『蒙古字韻』の「字母」(上冊第五右)をみると、伝統的な三十六字母を掲げ、その最後に「i,u,é,o,e,ũ,i 此七字歸喻母」とする。これは母音と半母音の出だしは「喻母に歸す」即ち「柔らかな声立てで始まる」ということを示したものである。

- 8) 『至正通寶 幕 ži 穿上 二穿下』 培按；此當二錢也。徑八分、或八分強、重一錢五分、面文瘦而長、與背有 sam,u, šli 者相同。背穿上為

蒙古「二」字、下為楷書「二」字。江秋史云；*ž* 日字頭、*i* 讀若「衣」。培按；「至」字「十」字皆从此尾。今所見銅印多作 *gi* 字、乃「記」字、亦从此尾也。

(わたくし培が案ずるに、これは當二の錢である。直径は八分或いは八分強、重さは一錢五分である。オモテの銘文の字は瘦長である。ウラには、*sam* (三)、*u* (五)、*šli* (十) と同種の字がある。ウラの方孔の上は蒙古の「二」であり、下は漢字楷書の「二」である。江秋史は『*ž* は日字頭であり、*i* は「衣」のように読む』とする。わたくし培が案ずるに、「至」と「十」は共にこの字尾に従う。今見ることのできる銅印も多く *gi* と作るわけであるがこれは「記」であり、やはりこの字尾に従っている。)

翁氏は *ži* を正しく「二」と読み、その韻母は「至」(*ji*) や「十」(*šli*) と同じであることを指摘する。さらに江秋史を引用し、*ž* は日母字で、韻母の *i* は「衣」のように発音するという説を紹介する。興味深いことに、翁氏は「銅印」即ち銅製の印鑑に刻された *gi* を正しく「記」と読み、その韻母も「二」*ži* における *i* と同じであるとする。

9) 『至正通寶 幕 *sam* 穿上 三穿下』 培按；此當三錢也。徑寸、輪稍濶。背穿上為蒙古「三」字、下為楷書「三」字。江秋史云；*s* 心字頭、(*a*)*m* 讀若「安」。・・・以下省略・・・。

(わたくし培が案ずるに、これは當三の錢である。直径は一寸で、外側の縁はやや広い。ウラの方孔の上は蒙古の「三」であり、下は漢字楷書の「三」である。江秋史は『*s* は心字頭であり、(*a*)*m* は「安」のように読む。・・・』とする。)

翁氏は *sam* を正しく「三」と読む。さらに江秋史を引用し、*s* は心母字で、韻母の (*a*)*m* は「安」のように発音するという説を紹介する。もっとも、「三」は *sam* で *-m* 韻尾、「安」は *-an* で *-n* 韻尾であるから、パスパ文字の表記では両者異なる。ここで「安」のように発音するとしたのは、江秋史当時の北方音に拠ったものであろう。

10) 『至正通寶 幕 *šli* 穿上』 培按；此當十錢也。徑寸三分、或徑寸三分半、又一種孔較大、字稍遜。背為蒙古「十」字。江秋史云；*šl* 禪字頭。按；「辰」字之禪音「産」、「十」字之禪音「善」。「辰」字之 *šl*、其左肩稍圓。此「辰」字「申」字兩頭所由分也。

(わたくし培が案ずるに、これは當十の錢である。直径は一寸三分或

いは一寸三分半で、方孔はわりに大きく、文字はやや劣っている。ウラは蒙古の「十」である。江秋史は『š1は禪字頭である』とする。[わたくし培が]案ずるに、「辰」の禪母は「産」の音で、「十」の禪母は「善」の音である。「辰」の š1 はその左肩がやや丸くなっている。[「申」の š2 はその左肩がやや尖っており]、「辰」と「申」の二つの字頭には区別がある。）

翁氏は š1i を正しく「十」と読む。さらに江秋史を引用し、š1 は禪母字であるという説を紹介する。次の翁氏の「按語」はなかなか興味深い。それによると、「辰」と「十」は共に禪母字であるが、翁氏当時の音によると、前者は「産」のように無声帯気の破擦音、後者は「善」のように無声の摩擦音で、両者に区別があったとする。これは現代北京語と同様である。翁氏による解説の内、ここまでは理解できるのであるが、その後が難しい。おそらく次のようなことであろう。翁氏当時の声母の発音は現代北京語と同様に、「辰」（禪母。現代北京語 chen）と「十」（禪母。現代北京語 shi）は異なっており、かえって「十」（禪母。現代北京語 shi）と「申」（審母。現代北京語 shen）は同じであった。しかしながら、「辰」と「十」は禪母であるからパスパ文字で表記するならば共に š1 とすべきであり、「申」（審母）の š2i とは異なるのだ、と言っているのであろう。

11) 『至正通寶 幕 seu 穿上 十穿下』 培按；此錢徑寸三分。背為蒙古「戌」字、下楷書「十」字。

（わたくし培が案ずるに、この錢の直径は一寸三分である。ウラは蒙古の「戌」であり、下は漢字楷書の「十」である。）

翁氏は seu を正しく「戌」と読む。

12) 『至正通寶 幕 γay 穿上 五穿下』 培按；此錢徑寸二分、然亦當五錢也。背為蒙古「亥」字、下楷書「五」字。

（わたくし培が案ずるに、この錢の直径は一寸二分であるけれども、當五の錢である。ウラは蒙古の「亥」であり、下は漢字楷書の「五」である。）

翁氏は γay を正しく「亥」と読む。

5. おわりに

上に紹介した『古泉彙攷』の記述の中に幾つか興味深い点がある。

一、まず、1) 2) によって翁宜泉が朱宋文（マ。朱宗文の誤写）の『蒙古

字韻』を用いてパスパ文字を判読していたことがわかる。これは注目すべきことである。『蒙古字韻』はパスパ文字と漢字を対応させた韻書風の書で、漢語近世音およびパスパ文字・漢語の研究にとって第一級の資料である。残念ながら元刊本は今に伝わらず、朱宗文の校訂の序（1308年）が付された写本が天下の孤本として大英図書館に所蔵されているのみである。この書がどの様に伝わり、どの様に使用されたかということをも明らかにすることはパスパ文字研究史にとって欠かせない部分であり、その一端を『古泉彙攷』の記述の中に見ることができる。なお5)によると、翁氏は š1in を正しく「辰」と読み、š1in「辰」と š2in「申」の声母の字形が異なることを指摘する。š1 は禪母であり š2 は審母であり、この両者はモンゴル語では区別されないが、漢語では区別がある。š1 と š2 は漢語専用の区別なのであるが、パスパ文字・漢語碑文などでは一部を除き普通には区別されない。明瞭な区別を持つ資料は『蒙古字韻』である。その下冊第二右葉には š2in と š1in が左右に並んでおり、その下にはそれぞれ漢字の「申」と「辰」がやはり並んで登録されている。貨幣銘文の「辰」に対して「申」という例字をもって説明を加えたのは、偶然ではなく、『蒙古字韻』に拠ったのであろう。

二、5) 6) 7) 8) 9) 10) において江秋史という人物の説が引用されている。江秋史は『古錢大辞典』（第一冊 89 丁右）によると「江秋史錢譜二十四卷寫本。江德量、字成嘉、號秋史。歙人、寄籍儀徵。庚子進士、官至御史。是書一卷」とある。これに拠り、江德量・秋史には写本『江秋史錢譜』があったこと、「庚子」の年に進士になったことがわかる。先に紹介した『吉金所見録』の凡例に「余古金之好、四十餘年來同好者、海昌陳輿伯、廣陵江秋史、北平翁宜泉、同邑趙北嵐數家。」として登場した廣陵の江秋史がその人である。この記述より、江秋史は翁宜泉とほぼ同時代の人物であること、進士となった「庚子」が乾隆の「庚子」の年（1780）であることがわかる。なお、翁氏は丁未の年（1787）に進士となっており、会試合格者として、江氏は翁氏のやや先輩にあたることになる。さらに、『古錢大辞典』（第一冊 76 丁）に採録されている「江秋史別傳」という一文によると、江氏は乾隆五十八年（1793）に 42 歳で没したという。没後、手稿本は晉の宋芝山に、次いで山東の初頤園の手に渡り、その後は世に出ることはなかったという。なお、当該書の最後の所有者と目される初頤園は、『吉金所見録』（1827）の著者である初尚齡・涇園の兄にあたる。名著『吉金所見

録』が『江秋史錢譜』の影響を被ったか否か興味深いところである。それはともあれ、7)によると、江氏も『蒙古字韻』を利用してパスパ文字錢の判読をしていたことがわかる。これは翁氏より稍早い時期の18世紀後半に当たるわけで、元が滅亡しパスパ文字を用いる伝統が途絶えて以降、『蒙古字韻』を利用してパスパ文字・漢語を判読した記録のうち、今のところ最初期の記録とみることができる。

三、最後に8)の中にみえる銅製の印鑑に係わる記述が興味深い。翁氏は銅印に刻されたgiを正しく「記」と読んでいる。現在でも、「gi」もしくは「姓+gi」などと刻された小型の私印が比較的多く残っており、これらは「記」と読まれる⁽¹²⁾。この判読がいつ頃まで遡るのかということが問題となるわけであるが、8)の記述に拠り、翁氏の判読を今のところ最初期のものとすることができる。

以上により、「18世紀末清朝人により、『蒙古字韻』を利用して元代の貨幣や印鑑のパスパ文字・漢語の判読が為された」⁽¹³⁾ということをパスパ文字研究史の中に位置づけることができる。

なお、江氏や翁氏など18世紀末清朝人は『蒙古字韻』を参照して、パスパ文字・漢語の音節を声母（音節初頭子音）と韻母（介音と主母音と韻尾）に分析し、その音節に相当する漢字を割り出して判読をしたわけであるが、パスパ文字・漢語の場合これで十分であった。韻母を更に分析し、音節を単音のレベルまで細分してパスパ文字の一字一字に就きその働きと音価を考えるとというようなことは不要であった。しかしながら、パスパ文字で記されたモンゴル語やテュルク語やチベット語やサンスクリット語など他の資料に応用しそれを読み解くためには、パスパ文字の一字一字をローマ字などに翻字し、その働きを考え音価を与えることは是非とも必要なことである。後者のような、さらに一步分析を進めた本格的な「解説」は、19世紀のヨーロッパ人の研究を待たなければならなかった。これについては注(4)で言及した中村雅之2006を参照されたい。

注

(1) 吉池孝一 2004「パスパ字チベット語の印章と紙幣」『KOTONOHA』(21号、13-16頁)を参照。『KOTONOHA』に掲載された諸論はサイト「古代文字資料館」(愛知県立大学 E511)のPDFファイルで閲覧することができる。

(2) Poppe,N.1957 *The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*,Second Edition translated and edited by J.R.Krueger,Wiesbaden,p.15.

(3) 『古代文字解読の物語』（モーリス・W・M・ホープ著、唐須教光訳。新潮社、1982年）という本の前文に次のようにある。「解読とは門を開くことであり、解釈とはその向こうにある広がりに関わることなのである」と。「門を開く」とはなかなか言い得て妙である。辞書を使い、ときに文法書をひもとき、「一定の手続き」に沿って進む。そうすれば、おのずと文の理解も進む。これは読解とか解釈にあたる。それに対して、文を理解するための「手続き」そのものを発見しながら読み解いていくのが解読ということなのであろう。

(4) 中村雅之 2006「パスパ文字漢語研究の黎明—19世紀西洋人の研究」『KOTONOHA』（46号、1-3頁）を参照。

(5) 桑行之等編 1993『説錢』上海科技教育出版社。全 1220 頁。

(6) 吉池孝一 2006「民国期（1928年）における或るパスパ文字判読の試み」『KOTONOHA』（47号）を参照。

(7) ローマ字翻字は「言語文化接触に関する研究」（2000年3月24日。アジア・アフリカ言語文化研究所）という研究会において配布した案に修正を加え「パスパ文字の字母表」（『KOTONOHA』37号、9-10頁、2005年）として公表したものによる。ただし印刷の便宜のため、後部歯茎音～硬口蓋音と目される有声破擦音を「j」で、破裂音と破擦音の帯気音を「t'」のように「'」で表記する。

(8) 吉池孝一 2006「清代古銭書にみるパスパ文字の判読」『KOTONOHA』（45号、14-18頁）を参照。

(9) 高漢銘 1990『簡明古銭辞典』江蘇古籍出版社。今は 1997 年第 5 次印刷による。760-776 頁参照。

(10) 丁福保 1938『古銭大辞典』上海初版。今は中華民国 54 年本による。

(11) 丁福保 1938 第一冊 29 丁によると、劉燕庭旧蔵の抄本『古泉彙攷』は、後に福山の王廉生に、庚子の変（1900年）の後は安邱の趙孝陸に帰したという。趙氏のもとに秘されていた同書を、山東図書館館長の王獻唐が請うて借り出し抄本を作り図書館に収めた。これは民国二十三年（1934）のことであった。その後、丁福保が、山東図書館本に拠り『古泉彙攷』の一部を『古銭大辞典』（1938）に収録したという。

(12) パスパ文字が刻された元代の印鑑には、官印とよばれる大型のもの

と、私印と呼ばれる小型のものがある。後者の私印には、様々な形態、内容のものがあり、『宋元古印輯存』（楊広泰編選。文物出版社、1995年）や『中国歴代印風系列 元代印風』（黄惇主編。重慶出版社、1999年）や『唐宋元私印押記集存』（孫慰祖主編。上海書店出版社、2001年）でその実物及び印影を見ることができる。なお、サイト「古代文字資料館」（愛知県立大学E511）も参考となる。

（13）吉池孝一 2006「乾隆嘉慶年間におけるパスパ文字錢の判読と蒙古字韻の利用」『KOTONOHA』（46号、24-29頁）を参照。